



牛久市歯科医師会  
渉外分科会発行

# 歯の健康新聞

第2号

平成21年11月8日

## 親の喫煙と子供の歯ぐき

父母など同居する家族に喫煙者がいると幼稚園児や小学生は虫歯に成り易くならず、歯肉が黒ずんだりする傾向のあることが、岡山大学の野勉教授(行動小児歯科学)の研究チームの調査でわかった。受動喫煙が影響している可能性があるという。大阪で開催中の日本小児歯科学会で発表された。

調査の詳細は、幼稚園児八十五人と小学生、百六十六人の計二百五十一人を対象にした結果、幼稚園児の約3割(二十三人)、小学生の約3割(五十一人)で歯肉が黒ずんでおり、このうち約8割の幼稚園児十九人、約7割の小学生三十七人は、同居する家族が喫煙者だったというもの。ちなみに健康な歯肉の子供でも家族の5割弱に喫煙者がいたけど、最も黒ずみがひどい子供の

グループには全家族に喫煙者がいたとのこと、親の喫煙は子供の歯に影響を与えているのが明確に！  
研究チームは『煙からの防御反応で歯肉が黒ずむのでは?』とみており、さらにタバコの煙によって唾液の量などが減り、むし歯の原因となるミュータンス菌が増えた疑いもあるとか。『まだ因果関係ははっきりしていませんが、子供に悪影響を与えない為にも禁煙を』(岡崎義男・岡山大学講師)の言う通り、今の快楽より将来の希望。子供の歯を守るのは家族の努力も必要ってことなんですね!  
(出典)朝日新聞2009年5月15日朝刊

## 幼児の気持ち、唾液で計測

赤ちゃんの気持ちを唾液で測れます。『ユニ・チャーム』は唾液に含まれる消化酵素アミラーゼで幼児のストレスを調べる研究結果をまとめ滋賀県で開かれた日本赤ちゃん学会で発表された。血液や脳波を調べる方法が幼児に負担が重い。そこでストレスを感じるのと分泌量が増えるアミラーゼに注目した。大人では一般的だが、幼児にも当てはまるのかを調べた。

調査は昨年2月と3月、生後18〜21ヶ月の幼児十一人を対象に実施。東大や京大、岩手大がデータ解析などで協力した。母親には、幼児に笑顔や「上手に出来たね」と声をかけ「ポジティブ」と、無表情で声をかけない「ネガティブ」で接してもらった。直接測定器具を幼児の口にふくませてアミラーゼの状況を計った。

その結果、母親が無表情で接した場合、笑顔の場合に比べて分泌量が約1.5倍に増えた。さらに、幼児側の「しかめっ面」など「ネガティブ」な行動も約40%増えており、行動面でも関連性が裏付けられた。岩手大学大学院の山口昌樹教授(生体工学)は「サンプルは少ないが、大人と同様に、赤ちゃんもストレスを感じるとアミラーゼの分泌量が増える事が確認できたといえる」と話している。

(出典)『朝日新聞』2009年5月15日朝刊



歯の心得

- 1、「歯ブラシを持ち歩かへし。」
- 2、「食べたらずみやかに、歯をみがへし。」
- 3、「正しいみがきかたは、歯医いさんで教わるべし。」
- 4、「歯の定期的な健診で、虫歯を未然に防ぐべし。」
- 5、「歯は、一生の友と心得るべし。」



## 3歳を過ぎるまでは、甘いものはガマン。

お母さん方に質問です。甘いおやつ、初めて食べたのはいつですか?実はこの甘いおやつ3歳を過ぎるまで与えないでほしいのです。なぜなら三つ子の魂百までと言うように子供の記憶に「甘い」という美味しさが強烈に焼きつけられるからです。味覚体験の少ないこどもは、その甘さの虜になり「もっともっと」と欲しがるようになります。3歳を過ぎ、ある程度の食体験を経て味覚が安定していれば、「味覚」に対しては、そこまで強烈な欲求には至らなくなります。

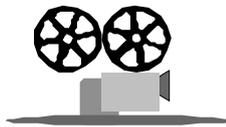
岡崎 好秀(小児歯科医)

## 小児の口腔保健

高木裕三先生(東京医科歯科大学小児歯科教授)

こどもの成長過程の中で、最もむし歯がでやすい時期は、5歳と15歳。この時期は乳歯と永久歯がそれぞれ生えてから2〜3年です。つまり生えたばかりの歯は、歯質が弱い傾向にあるのです。約24歳を過ぎると、新しくできる虫歯は限りなくゼロに近くなります。大人のむし歯は、こども時代にできたむし歯何十年もたつて大きくなったということなのです。

こどもの頃にむし歯予防ができれば、その生涯にわたる疾患の発生予防につながります。口腔保健の基礎はやはりこども時代の保健であるということ、是非皆さん認識してください。



牛久市歯科医師会は1986年6月の牛久市市政施行と同時に当時の茎崎町と分離し発足しました。現在34歯科医療施設の管理者で構成されており、日々の歯科診療の他牛久市との委託契約により成人歯周疾患検診や学校検診、1歳半・3歳児検診をはじめとして牛久市民の皆様に様々な医療サービスを提供しています